

## Ⅷ 実践報告Ⅴ「探究活動における外部機関との連携」

### 1 事例①（2年生）

#### （1）連携先

- ・ 竜串ビジターセンターうみのわ（高知県土佐清水市三崎 4032-2）
- ・ 高知県立足摺海洋館「SATOUMI」（高知県土佐清水市三崎 4032）
- ・ ふくしねっと CoCo てらす（高知県土佐清水市浜町 6-22）

#### （2）活動内容

##### 【連携の発端】

令和6年度の総合的な探究の時間において、竜串ビジターセンターうみのわ（以下、「うみのわ」という。）から、「誰もが利用しやすい施設を目指したい」との話があり、この内容に興味を持った2名の生徒が主体となり、観光施設にユニバーサルデザインを導入する取り組みが始まった。ユニバーサルデザインへの関心を背景に、施設や地域特性に応じた改善案を模索しながら、外部機関との連携を進めた。

##### 【連携の実際】

##### ・ 現地見学と打合せ

現地の施設を見学し、関係者との対話を通じて、設備の利点と改善が必要な点を整理するに至った。スロープや自動ドア、車いす対応トイレのような基盤は整っているが、点字ブロックや視覚・聴覚支援の不足といった課題が見つかり、活動が本格化した。



##### ・ ユニバーサルデザイン導入例①：キッズルームへの遊具導入

うみのわ内のキッズルームにおいて「遊べるものがほとんどない」という課題を発見し、子どもたちが安全に楽しめるように、危険性の少ないフェルト素材を使用した遊具を制作した。

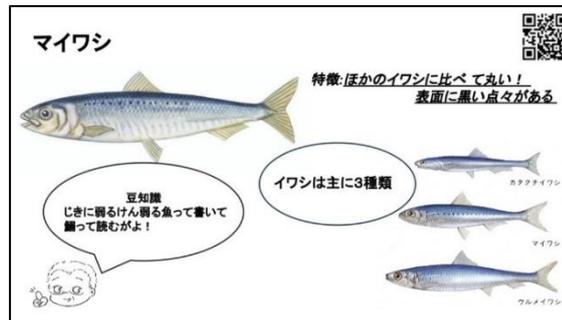


- ユニバーサルデザイン導入例②：視覚障害者のための触れる模型と手元資料の作成

うみのわ館内に展示されていたサンゴの模型から着想を得て、視覚障害者の方が水槽内の魚を触ってイメージできる模型を作成しようと考えた。そのサンゴ模型を制作した黒潮生物研究所に問い合わせたが、魚のひれなど薄くて細かい部分の制作が難しいこと、また予算の問題があり、模型の制作は断念した。



そこで、代替案として弱視の方に向けた手元資料の作成を進めている。この資料には、魚の特徴や豆知識をシンプルにまとめ、QRコードを読み込めば音声での解説を聞くことができるようにした。現在、誤った情報が含まれないよう、うみのわや SATOUMI の専門家と協議を重ねながら、完成に向けて取り組んでいる。



- 外部機関との連携を通じた学びと実践

施設にどのような工夫やユニバーサルデザインがあれば安心できるのか、また障害者についての基礎知識を深めるために、ふくしねっと CoCo てらすを訪問して説明を受けた。そして、実際に障害者の方へのヒアリングも行った。この活動を通じて得た気づきを整理し、スライドにまとめて中間発表を行った。

また、発表の場としても再び CoCo てらすを利用させていただき、学びを深めるとともに、次の取り組みに向けた方向性を明確にした。



- 安心して訪れるための情報発信への取り組み

ヒアリング活動を通じて、目的に関する情報不足が大きな不安要因であることが明らかになった。特に施設にどれだけユニバーサルデザインが導入されているか、障害者対応の経験があるスタッフがいるかといった具体的な情報が求められていることが分かった。これを受けて、障害者の方が安心して訪れるための具体的で明確な情報提供を目指し、うみのわのホームページを作成する取り組みを進めている。現在、利用者の視点に立ち、必要な情報を整理しながら作業を進行中であり、完成後には広く周知することで、より多くの方が安心して訪れる環境づくりを目指している。

・バリアフリー観光を目指した学びと実践

うみのわにて、土佐清水市内のバリアフリー観光を考える勉強会が開催された。参加者は清水高校の生徒2名をはじめ、土佐清水市内で観光に携わる事業者や住民、高知県バリアフリー観光相談窓口職員など多岐にわたる。講師として、NPO法人「福祉住環境ネットワークこうち」理事長の笹本氏を招き、バリアフリーとユニバーサルデザインの違い、必要性、考え方について学んだ。

また、この場では高校生がこれまでの取り組みを通じて得た気づきや、高校生だけでは解決が難しい課題について共有し、参加者全員で解決策を考える場ともなった。さらに、勉強会終了後には、施設内外を車いすで実際に移動し、車いす利用者の視点に立って課題を再確認する実地体験も行った。



(3) 成果

この一連の活動を通じて、生徒たちはユニバーサルデザインを現実の課題に即して学び、改善案を提案し、実践する力を身に付けた。障害者の方々の視点を理解することで、施設や地域のバリアフリー化に向けた具体的な取り組みが重要だと実感し、社会的な責任感や問題解決能力が向上したと思われる。

また、活動を進める中で、他者との協力や関係者の意見を取り入れることの大切さを学び、少しずつ変わっていく現状に対して達成感を感じていた。特に、実際に提案した改善案が形になっていく過程を見ることで、自分たちの行動が具体的な成果につながることを実感した。

(4) 課題

課題としては、連携先への複数回の訪問や、他の関係者との調整が必要なケースも多く、引率が少し負担に感じられた点が挙げられる。また、使える予算がない状況で、課題解決に向けた取り組みを考えることに限界を感じることもあった。特に、物理的な改善を行うためには一定の予算が必要となるが、その制約の中でどこまで実現できるかという点で、思うように進められないことがあった。

ユニバーサルデザインやバリアフリー化の取り組みは一度の活動で完結するものではなく、継続的に取り組むべきである。そのために、活動の意義や進め方を後輩にしっかりと引き継ぐ仕組みを作る必要がある。これまでの活動内容や得られた成果をまとめた資料を作成し、次年度以降に活用できる形で共有することや、引継ぎの場を設けて直接説明を行うことが重要だと考える。このような工夫を通じて、活動を途切れさせず、さらに発展させていける体制を整えていきたい。

## 2 事例②（3年生）

### （1）連携先

TheMana Village（高知県土佐清水市足摺岬 783）

土佐清水市足摺岬にあるリゾートホテルである。県外客のみならず、海外からも多くの観光客が訪れる。ホテル内にイタリアンレストランである Azzurrissimo がある。

### （2）活動内容

#### 【連携の発端（令和5年度の活動）】

令和5年度の総合的な探究の時間において、「土佐清水市の材料を使ってお菓子を作る」というテーマで探究を行っていた生徒（当時2年生）が、Azzurrissimo にスイーツのアドバイスや材料提供等をお願いしたところ、快諾してもらったのが連携の発端である。令和5年12月に顔合わせを行い、柚子や金柑などの柑橘類で作ったジャムを試食していただき、アドバイスをいただいた。これをきっかけとして、Azzurrissimo にて生徒が考案したスイーツをコースメニューのデザートとして提供するという話が持ち上がった。その後、小夏を用いたスイーツを開発すること、令和6年5月から6月頃の完成と提供を目指すことなどが、代表取締役の高野氏やシェフの高見氏との打ち合わせにより決定した。

#### 【連携の実際】

- ・小夏収穫体験（令和6年3月31日（日））

TheMana Village が提携する農園に出向かせていただき、小夏の収穫体験を行った。使用する小夏がどのように栽培され、収穫されているのかを自分の目で確かめる機会となった。



- ・校内試食会（令和6年4月9日（火））

提供するスイーツをカッサータ（イタリアの伝統菓子）とすることを決め、試作したものを教職員に試食してもらった。



- ・生徒による試作品の試食会

（令和6年5月11日（土））

生徒が試作した小夏を使ったカッサータを、シェフの高見氏など TheMana Village の関係者に試食していただき、実際に提供するカッサータをどのような味や仕上がりにするのか打ち合わせた。



- ・シェフによる試作品の試食会（令和6年5月17日(金)）  
生徒試作品をもとにシェフが作ったカッサータを試食し、提供するデザートとしての最終確認を行った。
- ・提供立ち合い（令和6年6月8日(土)）  
6月1日よりメニューに取り入れられたカッサータがお客様に提供されている様子を見るため、レストランのホールスタッフとして従事した。



### (3) 成果

総合的な探究の時間で取り組んだものが実際に商品として提供されたことは、生徒にとって大きな自信となった。また、提供までの過程において多くの大人と関わり、コミュニケーション能力や社会人としての振る舞いなどを身に付けると同時に、自分が「やりたい」と言ったことに対して、多くの大人が動いてくれることのありがたみを実感する良い機会となった。

また、連携先である TheMana Village は地元客を増加させることが課題としてあったとのことで、今回の取り組みは学校側だけでなく、TheMana Village にとっても地元客にアピールできる良い機会になったと思われる。

### (4) 課題

連携先との連絡・調整には多くの準備や時間がかかる。また、実際に連携先を訪問する際は、コーディネーターのみでの引率が不可能であるため、担当教員が同行する必要がある負担がかかるという点は課題である。

活動を後輩へ引き継ぐなど、継続的なものとなれば、取り組みのノウハウが蓄積し、活動をより広く深いものにできるうえ、教員の負担を徐々に軽くしていくことも可能であるように思われる。

## IX 実践報告VI「21世紀のジョン万育成プロジェクト」

### 1 取組の目的

身近な地域に目を向け、グローバルな視点も持ちながら、多様な文化、社会、価値観を深く理解し、互いを尊重する心を育む。また、他者との協働を通して、自ら課題を見出し、その解決に向けて主体的に活動できる能力の育成を目指す。

### 2 取組計画

- (1) ジョン万サミット 2024
- (2) 高知の魅力発信グローバル人材育成事業
  - ア 小・中・高合同授業研究会
  - イ Discover Kochi Project
- (3) 台湾・金甌女子高級中学とのオンライン交流
- (4) ジョン万生誕祭 2024
- (5) 学校設定科目「発信英語」

### 3 取組の詳細

#### (1) ジョン万サミット 2024 について

##### ア 概要

土佐清水市と姉妹都市提携を結ぶアメリカ合衆国マサチューセッツ州フェアヘイブンの交流事業の一環として、ジョン万サミット 2024 に参加した。

- ・ 10月25日：フェアヘイブン姉妹都市友好協会会長のジェラルド・ルーニー氏を含む9名の訪問団を本校にお迎えし、生徒との交流会を実施した。交流会では、歓迎セレモニーや生徒による学校紹介や地域の歴史や特産などの紹介を行った。
- ・ 10月26日：土佐清水市中央公民館で開催されたジョン万サミットにおいて、本校代表生徒7名が登壇し、姉妹都市交流の成果報告とジョン万次郎に関するプレゼンテーションを英語で行った。

##### イ 活動の様子（下段は生徒が作成したプレゼン資料より抜粋）



## (2) 高知の魅力発信グローバル人材育成事業

### ア 小・中・高合同授業研究会について

(ア) 日時 令和6年11月12日(火)

#### (イ) 概要

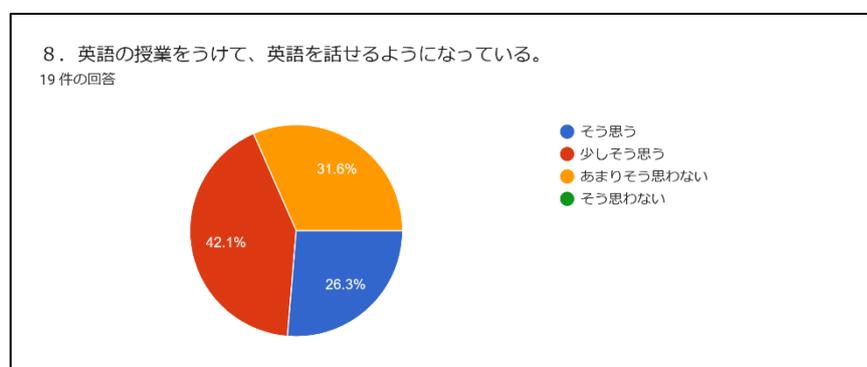
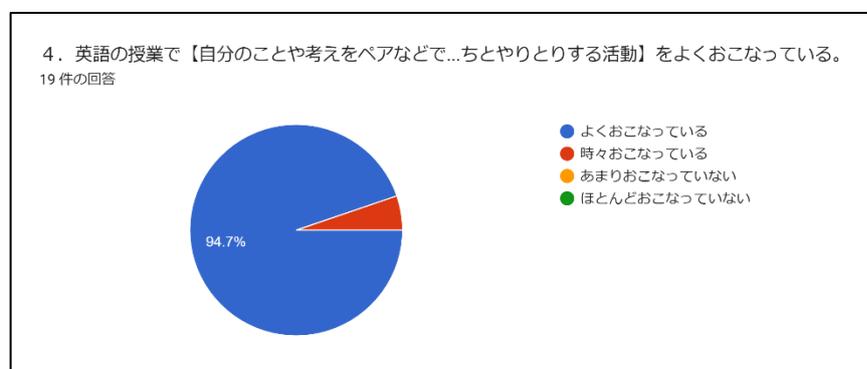
高知県教育委員会指定「高知の魅力発信グローバル人材育成事業」プログラムの一つとして、小中高12年間の学びのつながりを意識した教科経営、地域と一体となった英語教育の推進を目的に、土佐清水市立清水小学校、土佐清水市立清水中学校、清水高等学校で研究授業を行った。

信州大学学術研究院 酒井英樹教授を講師に招き、授業に関する指導助言や「グローバル人材の育成」をテーマに講演をしていただいた。

#### (ウ) 成果と課題

小中高連携 CAN-DO リスト形式による学習到達目標の共同作成、および指導案検討・教材研究会を定期的に開催したことで、校種を超えて生徒に育成したい資質・能力や、そのための効果的な指導方法等について協議を深めることができた。これにより、教員間の連携のみならず、生徒間の交流も実現に至った。特に、これまでほとんど実施例のなかった小学校と高校の連携授業においては、小学生が高校生に対して地域の魅力について英語で質疑応答を行うオンライン交流会を実施することができた。

本事業では、生徒に育成したい資質・能力の中でも、特に「話すこと [やりとり]」に着目した授業開発に取り組んできた。アンケート調査の結果から、「話すこと [やりとり]」の活動時間を授業内に確保できていることが確認できた一方、自身の成長を実感している生徒は68%にとどまっており、この点が課題として明らかになった。



イ Discover Kochi Project について

(ア) 目的

グローバル社会におけるさまざまな課題の解決に向けて、文化や言語の異なる人々と協働できるコミュニケーション能力を身に付け、英語で自分の意見を発信することができる。

(イ) 日時・場所：令和6年12月21日（土）高知県教育センター

(ウ) 概要

「自分たちの地域をよりよくするために、地域の課題を解決するプランの提案」をテーマにプレゼンを行い、その後聴衆と英語で質疑応答を行う。

(エ) 本校の発表について

以下、当日の発表スライドより一部抜粋

**TOSASHIMIZU LIVING TOUR**  
-Shimizu High School-

**Tosashimizu City Issues**

**Our Plan**  
Change vacant houses to **hotels!!**  
↓  
We would have tourists use vacant houses as hotels.

**Activities**  
1. High school students will **organize and conduct a local tour.**

**School Song Tour**

**Countermeasures**

- Place shoes near the bed
- Put earthquake resistant mat
- Put film on window glass
- Install motion sensor light

Other slide content includes: Koe Beach, Cape Ashizuri, Kagumi River, and a map of the area.

(オ) 生徒の感想より

- ・長い間練習してきたプレゼンテーションやQ&Aで楽しみながら発表をすることができて嬉しかったです。自校の発表の間には4校のステキなプレゼンテーションを聞き、新たなアイデア等を得ることができました。小中高の校種間交流では積極的な質問やコメントで盛り上がりました。自校の発表をした時にも興味を持ってくれたことがとても嬉しかったです。今まで知らなかったことや活動について知ることができたので、今後の活動に活かしていこうと思いました。
- ・今日は、他の学校の発表を開いて新たなことを考えるきっかけになったし、いい刺激をもらった。それぞれが自分の地域のことを考えて様々な気付きを得て、それを相手に伝えようとしながら発表していたと思う。発表は緊張するけど、無事に終わって良かったという気持ちと何かしらの点で成長できたのではないかと思う気持ちがある。いろいろな質問を聞いている人がしてくれてうれしかったけど答えるのが難しかった。また、急に校歌を歌うことになったけど何とかできた。今日はいい体験ができた。

(カ) 成果と課題

地域が抱える様々な課題の中から何を取り上げるか、そして、どういったプランを提案するか、という中身の部分について、生徒たちはそれぞれがアイデアを出し、話し合いを何度も重ね、試行錯誤しながらまとめていった。自分たちで考えた内容だからこそ、「聞き手にしっかり伝えたい」という意識をもって発表練習に取り組んでいた。本番では、臨機応変に行動しお互いをサポートしながら堂々と発表することができた。また、発表後のQ&Aでも、全員が自分の考えを質問者に伝え、英語でやり取りをすることができた。他校の発表を聞いた際には積極的に質問し、その後の小中高交流の時間にも、小中学生に伝わるように工夫しながら英語でやり取りをすることができていた。参加生徒にとっては英語で交流をする貴重な機会となり、英語でやり取りをすることに自信が出た生徒もみられた。

発表後のQ&Aでは一定やり取りができたものの、聞き取りづらかった時にもう一度言ってもらう、別の言い方をしてもらう、ゆっくり言ってもらうなど、使えるようになっておきたい表現が即座に言えなかった場面もあった。基本的な表現は何度も使いながら定着させていけるよう、日々の授業で継続的に4技能を使った言語活動に取り組んでいく必要があることを改めて実感した。

(3) 台湾・金甌女子高級中学とのオンライン交流

- ア 日時：令和6年11月20日（水）
- イ 対象：希望者を全学年から募集し、24名が参加
- ウ 内容：全体説明の後、少人数グループ（ブレイクアウトルーム）に分かれて交流
  - ・自己紹介（10分）
  - ・清水高校よりクイズ形式で学校や地域・日本文化紹介（20分）
  - ・金甌女子高校より「Thanksgiving day 感謝祭」についてクイズやディスカッション（20分）



- エ その他：オンライン交流以外にもオンライン掲示板 Padlet を使用して事前交流や、事後交流を続けている。



Examples of using Padlet



(4) ジョン万次郎誕生祭 2024

- ア 日時：令和7年1月25日（土）
- イ 場所：ジョン万次郎資料館（土佐清水市養老 303）
- ウ 対象：令和5年度フェアヘイブン姉妹都市交流参加者3名（3年生）および令和7年度フェアヘイブン姉妹都市交流希望者8名（1年生）
- エ 内容：

ジョン万次郎誕生198周年を記念し、ウェルカムジョン万の会（会長：田中慎太郎）主催のもと、本年度7回目の開催である。

来年度の姉妹都市交流に参加を希望する1年生8名が、「なぜこのプログラムに参加したいのか」「あなたにとってジョン万スピリットとは何か」をテーマに英語プレゼンテーションを実施した。

また、昨年度の姉妹都市交流参加者である3年生3名が、アメリカでの短期留学経験が自身の進路選択にどのように影響を与えたかについて発表を行った。またマサチューセッツ州フェアヘイブンの顕彰団体メンバーとネット中継で交流し、郷土の偉人に思いをはせた。



(5) 学校設定科目「発信英語」

学校設定科目「清水学際」と関連させ、探究内容を英語で発信し、その内容についてやり取りができる英語力を育成するための基礎を養うため、令和7年度より1年次に学校設定科目「発信英語Ⅰ」を設置する。また、令和8年度には2年次に「発信英語Ⅱ」を設置し、より実践的な力を育成することを目指す。

学校設定科目設置届出書（令和4年度以降入学生用）

学校名	高知県立清水高等学校	課程	全日制	学科	未来共創科
科目の 名称	発信英語 I			単位数	1
属する教科 の名称	外国語科	対象学年 (科・コース等)	1年	開始年度	令和7年度
使用予定 教科書	学校作成教材 発信英語 I 及び <i>The Destiny of a Castaway JOHN MANJIRO</i> by Kensuke Ozaki				
設置 ・ 変更 の 理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校設定科目「清水学際」と関連させ、探究内容を英語で発信し、その内容についてやり取りができる英語力を育成するための基礎を養う。</li> <li>・「発信英語 I」では、特に自分自身と郷土（土佐清水や高知）をテーマに学習し、発信する力を養う。</li> </ul>				
科目の 目標	「英語コミュニケーション I」の領域別の目標に準じて、ジョン万次郎の精神を学びつつ、自分自身と郷土について発信する資質・能力及び態度を育成する。				
	(1) 自分自身と郷土を客観的に理解し、やり取りをする英語力を養う。	(2) 自分自身と郷土について、多角的・多面的に考察し、その内容について、他者と意見のやり取りをする力を養う。	(3) 自分自身と郷土について、多角的・多面的に考察し、他者と意見のやり取りをする力を身に付けようとする態度を養う。		
評価 の 観点 及び その 趣旨	知識・技能 (知識・技術)	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度		
	自分自身と土佐清水や高知を客観的に理解し、やり取りをする英語力を身に付けている。	自分自身と土佐清水や高知について、多角的・多面的に考察し、その内容について、他者と意見のやり取りをしている。	自分自身と土佐清水や高知について、主体的に、多角的・多面的に考察し、他者と意見のやり取りをする力を身に付けようとしている。		
評価 方法	定期テスト・小テスト	定期テスト・小テスト	パフォーマンステスト		
	パフォーマンステスト 授業中の活動 提出物 等	パフォーマンステスト 授業中の活動 提出物 等	振り返りシート 授業中の活動 等		

年間指導計画

月	単元名	指 導 内 容	配当 時間等
1 学 期	自分を知ろう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の状況に応じて、効果的な自己紹介ができるようになる指導。</li> <li>・様々な状況における自分の姿を想像し、根拠とともに具体的に伝えられるようになる指導。</li> <li>・ジョン万次郎の体験(1)を学習し、その背景を探究的に学ぶとともに、彼の精神を自己と照らし合わせて考えられるようになる指導。</li> </ul>	1 3
2 学 期	郷土を知ろう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・客観的な事実と、個人の意見を効果的に組み合わせて、土佐清水や高知を紹介できるようになる指導。</li> <li>・他者から見た土佐清水や高知に関する意見等を読み、それについて論理的な考えを述べるようになる指導。</li> <li>・ジョン万次郎の体験(2)を学習し、その背景を探究的に学ぶとともに、彼の精神を自己と照らし合わせて考えられるようになる指導。</li> </ul>	1 4
3 学 期	他者を理解しよう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界各地の他者の状況を知り、それについて考えや意見を交換することができるようになる指導。</li> <li>・ジョン万次郎の体験(3)を学習し、その背景を探究的に学ぶとともに、彼の精神を自己と照らし合わせて考えられるようになる指導。</li> </ul>	8
合計			35 時間

## X 実践報告Ⅶ「高大連携授業」

### 1 取組の目的

本取組は論理国語の指導事項「多面的・多角的な視点から自分の考えを見直したり、根拠や論拠の吟味を重ねたりして、主張を明確にすること（A 書くことの(1)エ）」を指導するものである。「多面的・多角的な視点から自分の考えを見直」するためには、様々な素材が必要となる。本取組はその一つの素材として、高大連携授業を計画し、大学教員の講義を受講することによって、学術的な視点から「自分の考えを見直」すことを目的とする。

### 2 取組計画（取組の概要）

(1) 教 科：国語科（論理国語）

(2) 対 象：3年生（48名）

(3) 連携先：高知県立大学

(4) 概 要：論理国語の単元 「生きる意味とは何か―様々な視点から根拠と主張を吟味する―」の学習の一環として、高知県立大学文化学部准教授白岩英樹氏を招聘し、「人間はなぜ生きるのか」というテーマで講義をしていただく。

### 3 実施日時

令和6年11月1日（金） 9：45～11：35

### 4 取組の実際（実施内容）

#### (1) 高大連携授業実施までの授業内容

単元の問いを「生きる意味とは何か」とし、単元末に自分が考える「生きる意味」をレポートの形式で記述することとした。授業では、生きる意味について論じられている藤田正勝「生きる意味を見失ったとき」（澤田英輔他編『く読む力をつけるノンフィクション選』中高生のための文章読本』（筑摩書房、2022年）所収）および池田晶子「仕事と生活」（『14歳からの哲学 考えるための教科書』（トランスビュー、2003年）所収）を読解し、自分の考えを形成した。高大連携授業はこの二つの文章を読解した後に実施したものである。

#### (2) 高大連携授業の内容と実際

講 師：白岩英樹氏（高知県立大学文化学部准教授）

講義名：人間はなぜ生きるのか：行為と目的―芸術作品を手がかりに―

内 容：形体把握という目的に向かって創作（行為）するオーギュスト・ロダンと目的と創作（行為）が循環するイメージを持つアルベルト・ジャコメッティの比較。人間は目的に沿って行為をするだけではなく、行為が目的を形成していくこともあること。生きる過程における諸行為によって生きる意味が見出されていくこと。



生徒の様子：講義内容は高校生にとっては難しいと感じるものであったはずだが、丁寧な説明と進め方により、多くの生徒が抵抗感なく受講することができていた。

## 5 生徒の感想（原文ママ、下線稿者）

- ・今回の講義を通じて、私は「生きる意味」は何かの「目的」ではなく、日々の「行為」の中にこそ潜んでいることを再確認しました。目的が定まらなくても、あるいは意味がわからなくても、ただ行動し続けることで見えてくる何かがあるのだと感じました。そして、芸術作品はそれを私たちに気づかせるための媒介となっているのかもしれないと考えました。生きるとは、何かを達成することだけでなく、行為の中で意味を見つけ出すことで、芸術はそのことを教えてくれる貴重な手がかりになるということを感じました。
- ・「行為と目的の関係」を考えたときに、はじめはやっぱり「目的」がはじめに来ると思うけど、よく考えてみたら、何かしら行動しないと目的っていうのは見つからないんじゃないかという考えに変わりました。普段は触れることのない芸術作品を見ながら、芸術家たちの考えを知るのは、新鮮で楽しかったです。二時間だったけどもっと聞きたいと思えるくらい入り込みやすい話し方で、これが大学の講義なのか、と思いました。

## 6 成果と課題

### 〔成果〕

- ・芸術作品を例として生きる意味について講義するという高校国語科の教員には到底実施ができないような内容であり、「多面的・多角的な視点から自分の考えを見直す」という目的に資するものであった。
- ・高い専門性や深い知識、思考のもとに成立した授業であることが生徒にも伝わるような内容であり、学問とはどういうものか、大学で学ぶとはどういうことか、ということをも具体的にイメージすることにもつながった。

### 〔課題〕

- ・非常に丁寧な講義だったとはいえ、内容が高度なものであったことは事実であり、実際、あまり理解できなかったと述べた生徒も一定数存在した。
- ・授業内容を一任したこともあり、国語科の単元で学んでいることとのつながりを明確に説明したり示したりすることができず、今学んでいることと結び付けて受講できていない生徒の様子も少しではあるが見受けられた。

## XI 実践報告Ⅷ 「県外高等学校との連携事業（香川県立高松東高校）」

### 1 目的

県外の高校生と交流したり、普段ではできない体験・学習をしたりすることで、日々の学習では見つからない視点や考え方を得て、学習意欲・進路意識、コミュニケーション能力等を向上させる。

### 2 実施内容・実施時期等

#### (1) オンライン交流会

日時：令和6年12月6日(金)16:00～17:00

講師：和歌山大学 観光学部・大学院観光学研究科  
教授 加藤久美氏

内容：探究活動の現在までの成果・課題および今後の展望を発表し合う。当日は以下のような流れで実施した。

16:00～16:05 自己紹介

16:05～16:20 高松東高校生による発表・質疑応答

16:20～16:50 清水高校生による発表・質疑応答

16:50～17:00 加藤氏による講話・総評



参加生徒：2年生4名（高松東高校は2年生3名）

#### (2) 対面による交流会（予定）

日時：令和7年3月21日(金)、22日(土)

講師：和歌山大学 観光学部・大学院観光学研究科 教授 加藤久美氏

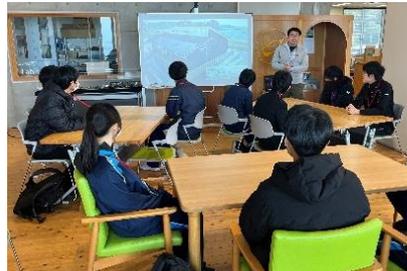
場所：高松東高校および高松市内

内容：探究活動の最終的な成果の発表

香川県立五色台少年自然センターにて研修

参加生徒：2年生4名（高松東高校は2年生3名）

※昨年度の対面による交流会の様子



### 3 生徒の様子

総合的な探究の時間で作成した発表資料をさらにブラッシュアップし、より良い発表をしようとしていた。また、他校の生徒の発表を聞いたり、専門的な視点からのフィードバックを得たりしたことで、今後の活動に対するモチベーションが高まったようだった。

#### 4 成果と課題

##### 〔成果〕

- ・他校の取り組みを知ることで、生徒のモチベーションを高められている。また、お互いに全く異なるアプローチによる探究であるため、視野を広げることにもつながっている。加えて、他校の取り組みや活動を知ることは、教員にとっても視野を広げたり教育活動のヒントを得たりすることができる機会となっている。
- ・現地での交流において探究活動の成果発表だけでなく、フィールドワークを取り入れることで、県外から訪れた方が自分の地元をどのように見る（捉える）のかということを知ることができている。昨年度参加した生徒の感想に「地元のためになにかしたいっていう気持ちがより一層強くなった」とあり、地元の価値を再認識する機会にすることができている。

##### 〔課題〕

- ・遠方であるため宿泊が避けられず、宿泊費・交通費をどのように捻出するかということ、今後も実施のたびに考えなければならない。
- ・総合的な探究の時間と本実践をより密接に接続する。例えば、高松東高校と共通のテーマで探究活動を行うようにすれば、もう少し頻繁にオンラインで交流をもつ必然性が生まれ、それにより探究活動を追究・拡大していくことができるようになると思われる。

## XI 実践報告Ⅷ-2 「県外高等学校との連携事業」 愛媛県立三崎高等学校主催「今を創る、未来を変えるトライブ」

- 1 本サミットの学習目標
  - (1) コンテキスト・シフティング力を身に付ける
  - (2) チームビルディングを身に付ける
- 2 期間及び日程
  - (1) 期間 令和6年12月12日(木)～12月13日(金)
  - (2) 日程

日	時間	内容	備考
12月12日(木)	12:30～	受付	会場：佐田岬半島 ミュージアム
	13:00～13:15	開会行事	
	13:15～13:45	グループワーク・ミュージアム見学・移動	
	13:45～14:00	各エリアに分かれてフィールドワーク	
	14:00～17:00	①三崎 ②二名津 ③大久 ④三机 ⑤九町 ⑥湊浦	
	17:00～18:00	まとめ・引率教員座談会	
	18:00～18:10	宿泊先移動	
12月13日(金)	18:30～ ～22:00	夕食 発表準備	会場：伊方町役場 本庁6F 大会議室
	9:00～9:15	開会行事(町長あいさつ)	
	9:15～10:30	写真発表	
	10:30～10:40	休憩	
	10:40～11:20	振り返りワークショップ	
	11:20～11:50	表彰・総評・まとめ	
11:50～12:00	閉会行事		

- 3 参加者(各校4名、計28名)
  - (1) 愛媛県：小松高校、今治南高校、東温高校、北条高校、三崎高校
  - (2) 愛媛県外：清水高校(高知)、那賀高校(徳島)
- 4 講師及びメンター
  - (1) 講師
    - ・大崎 恒次(専修大学 准教授)
    - ・笠松 浩樹(愛媛大学 准教授)
    - ・空田 真之(One Young World JAPAN)
  - (2) メンター
    - ・愛媛大学 教育学部1から4年生10名
    - ・引率：藤原 一弘(愛媛大学 准教授)

### 5 実施内容等

7校の高校生が集合して、①コンテキスト・シフティング力を高める ②チームビルディングを身に付ける の2点を目標に、伊方町の6地区でフィールドワークを行った。10枚しか撮影できないフィルムカメラ(チェキ)を使い、「えん」をテーマに撮影した写真のうち3枚を使って、地域の魅力をプレゼンした。プレゼンは大学教授等により評価され順位付けされた。(本校3名がそれぞれ入った3チームが金銀銅賞を獲得した)



#### (1) グループワーク・ミュージアム見学

事前にオンラインミーティングで顔合わせを行い、活動の流れや目的について共有した。フィールドワーク当日に実際に対面した際には緊張している様子が見受けられたものの、次第に打ち解けて主体的にコミュニケーションを図り、他校の生徒と協同的に活動する姿が見られた。

#### (2) フィールドワーク

各グループが「えん」をテーマに写真撮影を行い、ガイドメンターの案内のもと、地元の説明を聞いたりインタビューを実施したりしながらプレゼンテーションの素材を収集した。「えん」というテーマは多様な解釈が可能であり、例えば「円」や「縁」といった視点から、その地区の持つ魅力を深く考察する機会となった。



#### (3) プレゼンテーションに向けた準備

宿泊所に帰ってきた後も熱心に活動に取り組み、翌朝も早朝から準備を行うなど、主体性と積極性を持って臨んでいた。また、愛媛大学教育学部の学生2名が各グループにメンターとして入り、活動の補助や助言を行った。メンターの存在により、生徒たちは話し合いの方向性を見失うことなく、効果的にプレゼンテーションに向けた準備を進めることができていた。



#### (4) 写真発表

最終発表では、共通テーマである「えん」に加え、各グループにランダムに割り当てられた「静と動」「イノベーション」「風土」など異なるテーマも組み込んだ発表が行われた。フィールドワークで撮影した写真の中から3枚を選び、それらを基にテーマに沿ったプレゼンテーションを実施した。今回は「ノンデバイス」での発表という条件のもと、模造紙を効果的に活用し視覚的な工夫を凝らしていた。また、デバイスに頼らない分、発表内容が具体的かつ説得力のあるものになるよう、言葉や構成に力を入れていた点が印象的であった。



### 6 成果

立地状況や地域の抱える課題など、共通する視点を持って活動したことで、本校生徒にとっても新たな気づきや学びがあったと考えられる。また、写真を通してテーマを深く掘り下げ、各グループの創意工夫を凝らして仕上げたプレゼンテーションを聞き合うことで、「コンテ



テキスト・シフティング力」の向上にもつながる学びが得られたように感じる。そしてなにより、本校の生徒にとって他校生との交流は貴重な機会であり、主体的にコミュニケーションを図りながら他者とつながり、チームビルディングの基礎を身につけられたことが最大の成果だと感じている。事後の活動でも生徒から「参加してよかった」という声が多く聞かれた。この主体的な取り組みを通して得られた協働する力や柔軟な思考力が、今後の学校生活へと活かされていくことを期待している。

## XII 実践報告Ⅸ「高知大学訪問学習」

### 1 取組の目的

事前学習と訪問学習を通じて、探究活動とはどのようなものかを知り、探究活動に必要な問いを持つことについて、体験的に学び、今後の探究活動に役立てる。【Keyword：視野を広く持たせる・探究の推進】

### 2 取組計画

- (1) 教科：総合的な探究の時間
- (2) 対象生徒：1年生全員（42名）
- (3) 担当教員：主幹教諭、1年学年主任、1年学級担任、総合企画部長、コーディネーター
- (4) 概要：高知大学…講義「探究学習を考える」

### 3 実施時期

令和6年4月22日（月）7限目 事前学習  
令和6年4月26日（金）終日 訪問学習

### 4 実施内容

令和6年4月22日（月）7限目 事前学習 視聴覚室

総合的な学習の時間指導案		
令和6年4月22日月曜日 7限目 15:30～16:20		
(1) 本時の目標 <ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜ「探究」をするのか理解する</li> <li>・探究をすることで身につけることができる力を理解する</li> </ul>		
(2) 学習の展開		
	学習活動	指導上の留意点（○）と支援（◆）
導入 【10分】	●今日の目標の確認  ●中学校までとの違いを考えさせる 「総合的な学習の時間」 ↓ 「総合的な探究の時間」	3人グループで考える 何人か意見を聞く 自分で課題を発見し、自分なりの答えを出す ことが大切であることを理解する
展開 【35分】	●答えのない問題とは グループワーク：清水高校の生徒を増やすには？ →探究活動には1つの決まった答えがあるわけではない  ●なぜ「探究」を学ぶのか iPhoneはいつできた？→現在の普及率は？ 急速に社会は変化している？ →問題発見力や情報収集、課題解決力が求められている。これらは探究活動によって身につけることのできる力である。	自由に考えさせ、ワークシートに記入→グループで意見交換 メンバーの意見は否定しないことに留意させる  身近な製品を取り上げることで、当たり前に使っている製品だが、生産されてから十数年しか経っていないことを理解させる  変化の激しい社会で今後の企業は社員にどのような能力を求めているか予想させる →何名か意見を聞く
まとめ 【5分】	●振り返り ワークシートに本時の振り返りをする ・なぜ「探究」をするのか？ ・探究をすることで身につけることのできる力は？	

令和6年4月26日(金)

12:00~12:30 高知大学見学

13:10~14:40 講義・演習

「探究学習を考える」

講師：高知大学 地域協働学部 講師 今城 逸雄氏

生徒以外の参加者：管理機関（高知県教育委員会事務局高等学校振興課）、  
本校コーディネーター

当日のプログラム

自己紹介

講義：探究を考える

グループワーク「アポロ11号は本当に月に行った？

そもそも、なぜ探究学習が求められているか」



○高知大学 今城先生の講義を受けて、生徒の感想

- ・なぜそれが本当に正しいのか疑問をもって生きていきたいと思いました。先生が言っていることが本当に正しいのか疑問をもって授業を受けたいと思います。
- ・学校関連の言葉をそのまま漢字の読み方にとらわれないというのがとても心に響きました。例えば、「教育」という言葉は、教えて育てるという意味があるのもそうなんだけど、英語にした時の education という言葉は、能力を引き出すという意味があり、全く違う意味になるというところが興味深いなと思いました。そして、失敗したら恥ずかしいという思いを捨て、きちんと自分から行動をしていくというのは将来、高校生活や社会に出た時に役に立つと思いました。
- ・普段ならスルーしていた「前ならえ」や運動会の行進、教室の机の配置などの意味、どうしてするのかを考える機会ができ、物事に対する疑問が出てきた。講義を聞くまで気にしていなかった校門がなんであるのかなど、いつもの生活の中にある普通に対する見方を変えることができ、新しい発見ができる気がしてきました。

○訪問学習から学んだことを今後どのように役立てたいか、生徒の感想

- ・ 普段の生活や授業で、「先生がこう言っているから」や「みんながこうしているから」と思って生活するのではなく、「なんでこうなるのだろう」という批判的な目線を意識していこうと思います。
- ・ 様々な視点で考え、そこから生まれてくる疑問について自らが主体となって考え、課題解決に向けて取り組んでいきたいと思っています。
- ・ 「思い込み」や「常識」にしばられず、知識や事象を疑って物事の背景を知る、ということを中心として今後の学習に取り組みたいです。
- ・ いろんなことに疑問をもって、なぜそうなるのか、そう思うのかを大切にしていきたい。自分で考えるようにする。

## 5 成果と課題

日頃当たり前だと思い、気にも留めなかったことが本当に正しいことなのか疑うという視点を持つことを多くの生徒が体験できた。この取り組みの目的である「探究活動に必要な問いを持つことについて、体験的に学ぶ」についてはおおむね達成できたと考える。生徒の感想からも、普段の生活や授業でも批判的な視点を意識したい、物事の背景を理解したいといった記述がみられ、日常的に問いを持つことへの意識づけができたと思われる。しかし、抱いた疑問を発信する、自主的に疑問を解決しようとするまでには至っていない。そのため、そのような行動に向かわせるためにどのような手立てを用意すべきなのか、もしくは生徒の自主性に任せるべきなのか、検討していきたい。

## XIII 実践報告X「先進校視察」

- 1 訪問先：京都市立開建高等学校
- 2 日時：令和6年11月22日（金）（令和6年度京都市立開建高等学校教育研究大会）
  - 10:00～10:20 開会
  - 10:40～11:30 公開授業①（1年生保健・地学基礎・英語コミュニケーションI）
  - 12:30～13:00 総合的な探究の時間「協創」について
  - 13:10～14:00 公開授業②（1・2年生協創I・II）
  - 14:10～15:00 全体協議
  - 15:00 閉会
  - 15:20～16:00 担当者との協議（研究開発主任 村井 昂介 先生）

### 3 内容

#### （1）開建高校の教室の設備や環境について

1 クラスは80人で、教室は普通教室4つ分の広さの学習空間である。教室の四方の壁全体がホワイトボードになっている。また、可動式ホワイトボード壁の設置とキャスター付きの机と椅子の配置により、授業の目的や生徒の活動内容に合わせてレイアウトを自在に変更できるようになっている。授業は教員3名が担当している。

#### （2）公開授業①について

主に英語コミュニケーションIと保健を参観した。

英語コミュニケーションIでは、ネルソン・マンデラを扱った単元で「優れたリーダーが備えている資質」に関して自分の意見を述べることをゴールの活動として学習に取り組んでいた。授業の冒頭部分は80人一斉の講義形式で、T1が全体の進行や指示を担っていた。T2、T3の教員は、進行を補助したり、個別にサポートの必要な生徒のそばにいたり、活動中の机間指導や支援を行ったりしていた。後半には、生徒は3人組になり、リーダーの資質として大切だと思うものについて各自の意見のやり取りを行っていた。

保健では、「喫煙」「飲酒」「薬物乱用」の分野に関する7つの問いの中から気になる問いを1つ選択し、同じ問いを選択した生徒でグループを作り、自分たちで導き出した問いの答えを壁面のホワイトボードに書き発表し合っていた。

それぞれの授業で、目的に応じて80人の大教室の形にしたり、可動式の壁で区切って3講座に分けたりしていた。活動内容に合わせてレイアウトを変えることによって、グループワークやコミュニケーション活動に取り組みやすくなり、教室環境により協働的な学びが促進されていることに驚いた。英語の授業では、80人というクラスサイズでは生徒一人ひとりの声を拾い上げることが難しい面があるものの、多様な考えに触れることができるという大きなメリットもあることを認識した。

#### （3）公開授業②について

総合的な探究の時間「協創」では、1年生は「京都探究」に取り組んでいた。地域の企業や行政、諸団体などから与えられた「考える素材」について、生徒たちは自分たちならどう考え、取り組むか、という視点で、前時に行ったフィールドワークで得たことをまとめ、チーム間交流を行っていた。2年生は、個人あるいはグループでそれぞれが設定した課題について探究活動を行っており、翌週の1年生に向けた発表のための準備に取り組んでいた。探究活動の方向性が近い生徒たちが、分野を超えて情報を交換したり助言し合ったりできるように6つの「ラボ」が設定されており、それぞれのラボに分かれて授業が行われていた。

「協創」では1年次から3年次まで徐々に自由度が高くなるよう設計されており、1年前期では、ものの見方・考え方と教科学習とを融合させて探究活動を行う「協創パースペクティブ」と、身近な事例で商品開発を目指してアイデアを出す「SMALL START」という2つの取り組みを行い、1年後期では授業を参観したように「京都探究」に取り組

む。2年から3年にかけては、生徒が自ら課題を設定し探究活動に取り組む、という流れになっている。「協創」の設計においては、課題設定までに生徒の興味・関心を拡大し、「やってみよう」を探索すること、また、多様な他者との協働を複数回経験し、触発されつつ自分の探究を育てることをポイントとしているとのことだった。「協創」の授業は、1・2年生ともに金曜日の5・6限に設定されており、1クラスに複数人の大学生がアシスタントとしてサポートに入っていた。「京都探究」では、京都市の行政に加えて世界規模で事業を展開している企業や長い歴史を持つ企業とも連携して取り組んでおり、京都市という地域の持つアドバンテージを活かした授業設計がされていることが印象深かった。また、1年生の授業では、フィールドワークで得た情報をまとめて発表する際にホワイトボードの壁が大いに役立てられている様子が強く心に残っている。一つのボードに言語化された情報は視覚情報としてもコンパクトにまとめられており、他のチームの考えに触れ、視野を広げるといった目的にかなった取り組みであった。多様な考え方に触れ視野を広げる、というポイントは、小規模の自校では今後更に意識的に組み込んでいく必要性を感じた。

#### (4) 全体協議について

研究開発に関する成果と課題を中心に以下の内容が協議された。

授業では、思わず考える問いを設定するなど、生徒の主体的な学習につながるような工夫がされている。生徒だけでなく、教員間でも協業が進んでいる。一方、授業の講義パートと活動パートでは、講義の部分がまだ多いことや、評価の部分まで含めると改革は途中段階である。

探究活動では、課題の内容の多様化が実現してきているものの、課題設定に悩んだりする生徒や自分の探究に自信を持っていない生徒も多い。教員の探究指導スキルの向上も継続的な課題である。

課外活動では、想定以上の生徒が活動に参加しており、課外活動の種類も豊富であるが、生徒自身による立案が少ないことや、教員の業務の調整が課題である。

#### (5) 担当者との協議について

研究開発主任の村井昂介先生と以下の内容について協議した。

##### ア 学校設定科目の評価について

学校設定科目「ルミノベーションⅠ」では、育成を目指す資質・能力を16のコアスキルとして設定しており、授業の中で特に光っていたスキルを1から2つ取り上げ、文章で評価している。例えば、「伝えてみる」というコアスキルは「自分の意見や考えを表明し、相手の反応や意見を受け止めつつ、理解を促す」という文章で説明されており、この文章を使って評価することになる。フォーマットを予め準備しておいて、担当者に入力してもらい、という手順にしている。もし、コアスキル以外の表現を使って評価したい場合は、担当者が文章を作成する。

##### イ 「地域」の認識について

活動の目的や内容によって地域をどう捉えるかは変わってくる。「京都探究」で連携している京都市南区役所に関する活動であれば南区になり、京セラのような世界的な企業であれば、日本や京都、という認識になってくるため、その都度変わってくる。活動の前に教員・生徒間で共通認識を持つようにしている。

##### ウ コーディネーターとの協働について

現在のコーディネーターの方は、コーディネーターとしては2.5日の勤務であるが、支援員としての勤務もあり、学校にいる時間が長く連携が取りやすい環境である。

##### エ 「京都探究」の「考える素材」をもらう企業等について

今年度は昨年度よりも連携している企業等を増やしている。生徒にとって良い考える素材を提供してくれるところと連携を継続していきたいと考えている。地域協働コーディネーターの協力も得ながら連携先の拡大をしていきたい。

## XIV 実践報告XI「高知大学生との交流会」 室戸高等学校・清水高等学校をつなげるプロジェクト（仮）

### 1 交流会を開催するに至った経緯

8月に実施した第1回運営指導委員会のもと、運営指導委員である高知大学地域協働学部石筒覚准教授から、清水高校と室戸高校両校から地域協働学部に入学生を中心にして、学校近辺にジオパークがある共通点を活かした両校の交流活動をしてはどうかという提案を受けた。

打ち合わせをする中で、令和6年度は両校の交流ではなく、大学生と各校の交流を行い、令和7年度以降に両校の高校生が交流する活動を実施につなげることとなった。室戸高等学校では12月に高知大学生と室戸高校生の交流が行われている。本校では以下の内容で、3月に大学生との交流活動を実施する予定である。

### 2 目的

高校生が大学生と交流することで視野をひろげるとともに、コミュニケーションスキルの向上を目的とする。

### 3 実施時期

令和7年3月13日（木）10:45～12:35 清水高等学校体育館

### 4 参加者

高知大学学生3名および令和6年度清水高校卒業生有志、清水高校1，2年生

### 5 実施内容

大学生主体の進行による以下の内容を計画している。

- ①アイスブレイク
- ②大学生と清水高校令和6年度卒業生による体験談を聞く
- ③質疑応答

### 6 期待される生徒の様子・成果

- ・大学での学びや探究活動を知ること、視野をひろげ、自身の探究活動を充実させようとしている
- ・進路実現に向けて多くの情報を入手しようとしている
- ・体験談を聞くことで、進路の視野が広がり、自身の進路実現に向けた取組を主体的に行っている

# 指定校事業概念図

管理機関名：高知県教育委員会

令和6年度 新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

## 【高知県立清水高等学校】 学際領域学科（令和7年度設置）

### 清水高校の学際的学び「ジョン万次郎×SDGs」

SDGsについて、ジョン万次郎の生き方や考え方や重ね合わせながら探究する。また、小中高が一貫して取り組むことができるような系統的なカリキュラムを開発する。

### 目指す人物像 21世紀のジョン万次郎

- ① 自然科学、社会科学、人文科学の各分野について、横断的に学び、専門性にとられない柔軟な思考を身に付けている。
- ② 課題や目的を自ら設定し、国際的な視野で問題を解決しようとする態度を身に付けている。
- ③ 多様な他者と協働して新たな価値を創造する力を身に付けている。

### 令和6年度の目標

- ① 特定の分野に偏らない学びを実現させるため、文理融合した教科等横断的なカリキュラムを開発する。
- ② 最先端の科学を学ぶため、自然科学・社会科学・人文科学等の分野について、大学、研究機関、官公庁、民間企業等と連携する。
- ③ 国際的な視野を身に付けさせるため英語教育を充実し、国際交流を促進する。
- ④ コンソーシアムと連携し、学校内外が一体化した教育活動を行うことで、社会に開かれた教育課程を実現する。



「海外高等学校との交流、成果発表会の実施」  
日々の学習では見つからない視点や考え方を  
得て、学習態度・進路選択・コミュニケーション  
能力等を向上させる実践事例。



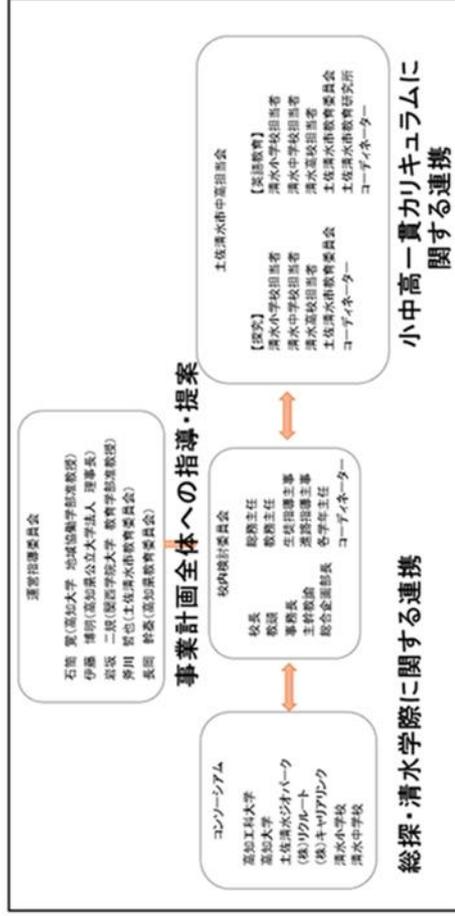
「SDGsに関する探究的な実践」  
SDGsの本質について外部機関と連携し、  
知識を得ることで、自分の考えを構築する本  
課事例。



「グローバル人材育成を目指した実践」  
海外への短期留学や、文芸交流のオンライン  
交流を通して、実践的な英語力を身に付け、  
国際的な視野を育成する実践事例。

### 推進体制

運営指導委員会からの助言等を校内検討委員会において具体的に取組案として策定し、コンソーシアム及び小中高担当者会で実践例に係る協議を行い、実践する。



### 総探・清水学際に関する連携

### 小中高一貫カリキュラムに関する連携

#### 成果

- ① 新学科設立に向けた具体的なカリキュラム開発のために、総合企画部を新設し、学校設定教科科目「清水学際」についてカリキュラム開発ができた。
- ② 台湾との交流や発表会をとおして、異文化を体験し、意欲的にコミュニケーションを図ることで、英語運用能力の向上につながった。
- ③ 運営指導委員会等からの助言により、教育計画全体を見直すことができた。

#### 課題

- ① 清水学際のカリキュラム運用について、関係機関やコーディネーターと、より連携を深める必要がある。
- ② グローバルな視点を育成するために、より国際理解教育を充実させる必要がある。
- ③ 教育活動の発信が不十分なため、オンラインなどを活用し、保護者や地域が関心を持つ機会を拡大させることが課題。

「清水学際」関係資料

学校設定科目設置届出書（令和4年度以降入学生用）

学校名	清水高等学校	課程	全日制	学科	未来共創科
科目の名称	清水学際 I			単位数	2
属する教科の名称	清水学際	対象学年 (科・コース等)	( 1年 )	開始年度	令和7年度
使用予定教科書	学校作成プリント				
設置・変更の理由	学校設定教科の学習テーマに設定しているSDGsにおける5つのターゲット（9, 産業と技術革新の基盤をつくろう、10, 人や国の不平等をなくそう、11, 住み続けられるまちづくりを、14, 海の豊かさを守ろう、15, 陸の豊かさを守ろう）のうち、9・10・14・15の4つについて、土佐清水市における現状や課題を知り、他の地域と比較・分析し、根拠の明確化や解決課題等に向かう探究活動の基礎を学習する学校設定科目「清水学際 I」を設置する。				
科目の目標	SDGsを題材に地域をフィールドとして思考法、事実認識、計画性、他地域との比較及びその実行などを通して「探究の仕方」を学び、2年次以降の探究方法を習得することを目指す。				
	探究するために必要な基本的な知識及び技能を身に付けるようにする。	多角的、複合的に事象を捉え、課題を解決するための基本的な力を養う。	様々な事象や課題に好奇心をもって向き合い、粘り強く考え行動し、課題の解決に向けて挑戦しようとする態度を養う。		
評価の観点及びその趣旨	知識・技能 (知識・技術)	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度		
	探究するために必要な基本的な知識及び技能を身に付けている。	多角的、複合的に事象を捉え、課題を解決するための基本的な力を身に付けている。	様々な事象や課題に好奇心をもって向き合い、粘り強く考え行動し、課題の解決に向けて挑戦しようとしている。		
評価方法	ワークシート 発表 観察	ワークシート 発表 観察	ワークシート 発表 観察		
備考	評価については、目標や内容等から数値的な評価になじまないと判断し、観点別学習状況の評価や評定は行わず、学習の状況や成果などを踏まえて文章で評価するものとする。				

年間指導計画

月	単元名	指 導 内 容	配当 時間等
4	○ガイダンス ○探究とは何か？(4月末) ○SDGs	高知大学地域協働学部 今城逸雄先生 講義	2 2
5	「10. 人や国の不平等をなくそう」 Part 1	高知県と土佐清水市の人権課題を知る 現実・平等・公平・公正を考える 土佐清水市の現状 ~障がいと社会~ 犯罪被害者 土佐清水市の現状 ~認知症~	1 2
6		ノーマライゼーション まとめ・振り返り	
7	「9. 産業と技術革新の基盤を作ろう」 Part 1	日本の産業構造の変化をグラフから読み取る 土佐清水の産業構造の変化をグラフから読み取る まとめ・振り返り	6
9	「14. 海の豊かさを守ろう」	土佐清水市の仕事の中で海に関わる仕事を知る 海に関わる業種の方に聞く それぞれの産業の取り組み・課題を共有 まとめ・振り返り	1 4
10			
11	「15. 陸の豊かさを守ろう」	土佐清水市の「陸」にある自然を確認 土佐清水市の「陸」にある特産品について 陸の豊かさを守るために（環境省保護官） ヤブツバキ再生プロジェクト（環境省・地域住民） 清水の地形と食文化の関わり（ジオパーク）	1 4
12		伝統食をつくってみよう まとめ・振り返り	
1	「10. 人や国の不平等をなくそう」 Part 2	フィールドワーク 地域のバリアフリー化マップづくり まとめ・振り返り	8
2	「9. 産業と技術革新の基盤を作ろう」 Part 2	土佐清水にできる持続可能な経済開発は何か 立案・提案・交渉	8
3	○まとめ・振り返り	まとめと2年のプロジェクト選択に向けて	4
合計			70 時間

# 重点育成能力

(教員用)

	Keyword	重点育成能力	1年生	2年生	3年生	
探究の推進	視野を広く持たせる 経験を積み 貢献への意欲を醸成する	認知・協働 (思考・判断・表現)	A	自分の考えを相手に理解できるよ うに表現方法に工夫を加え説明し ている	相手の考えを理解し、自分の考え になかった新しい思考に気づき、 それを言語化して表現している	自己と他者の考えを理解したうえ で、状況にふさわしい考えを導き 出し、それを言語化して表現して いる
			B	自分の考えを相手に理解できるよ うに説明をしている	相手の考えを理解し、自分の考え になかった新しい思考に気づくこ とができる	自己と他者の考えを理解したうえ で、状況にふさわしい考えを導き 出せている
			C	自分の考えを相手に理解できるよ うに説明することに努力を要する	相手の考えを理解しているもの の、自分の考えになかった新しい 思考に気づくところまで至ってい ない	自己と他者の考えを理解している ものの、状況にふさわしい考えを 導き出すところまで至っていない
探究の推進	経験を積み 貢献への意欲を醸成する	問題解決 (知識・技能)	A	地域や社会の状況を理解し、教師 の働きかけによって「なぜ?どう して?」の視点をもち、自ら解決 に向かおうとしている	地域や社会の状況を理解し、自ら が「なぜ?どうして?」の視点を もち、解決に向かうことができる	地域や社会の状況を理解し、自ら が「なぜ?どうして?」の視点を もち、解決している
			B	地域や社会の状況を理解し、教師 が提示した「なぜ?どうして?」 に気づき、教師と解決している	地域や社会の状況を理解し、教師 の働きかけによって「なぜ?どう して?」の視点をもち、自ら解決 に向かおうとしている	地域や社会の状況を理解し、自ら が「なぜ?どうして?」の視点を もち、解決に向かうことができる
			C	地域や社会の状況を理解している ものの、教師が提示した「なぜ? どうして?」に対して、教師と解 決するところまで至っていない	地域や社会の状況を理解している ものの、教師の働きかけによって 「なぜ?どうして?」の視点を持 つところまでに至らないため、自 ら解決に向かうことができていな い	地域や社会の状況を理解し、自ら が「なぜ?どうして?」の視点を 持つことができていないもの、解 決に向かうところまでには至って いない
探究の推進	視野を広く持たせる 経験を積み 貢献への意欲を醸成する	主体性 (主体的に学習に取 り組む態度)	A	振り返りの中から新たな課題を見 出し、それを解決するための計画 を立てている	計画→実践→振り返り→再計画… という一連のサイクル循環を自ら 構築し実践している	計画→実践→振り返り→再計画… という一連のサイクル循環を自ら 構築し実践し、新たな方向へと視野 を広げ粘り強く取り組んでいる
			B	計画→実践→振り返りの1サイク ルを実践している	振り返りの中から新たな課題を見 出し、それを解決するための計画 を立てている	計画→実践→振り返り→再計画… という一連のサイクル循環を自ら 構築し実践している
			C	計画→実践→振り返りができない	振り返りの中から新たな課題を見 出しているもの、それを解決す るための計画を立てるところまで 至っていない	計画→実践→振り返り→再計画… という一連のサイクル循環を自ら 構築し実践するところまで至って いない

(生徒用)

	Keyword	重点育成能力	1年生	2年生	3年生
探究のめり込み	視野を広く持とう 経験を積み 貢献への意欲を醸成する	自分と他者の相違を理解し、広い視野を持って新たな価値を創造する力	自分の考えを相手に理解できるよ うに説明することができる	相手の考えを理解し、自分の考 えになかった新しい思考に気づ くことができる	自己と他者の考えを理解したう えで、状況にふさわしい考えを 導き出せている
			地域や社会の状況を理解し、教 師が提示した「なぜ?どうし て?」に気づき、教師と解決で きる	地域や社会の状況を理解し、教 師の働きかけによって「なぜ? どうして?」の視点をもち、自 ら解決に向かうことができる	地域や社会の状況を理解し、自 らが「なぜ?どうして?」の視 点をもち、解決に向かうことが できる
			計画→実践→振り返りの1サイ クルを実践できる	振り返りの中から新たな課題を 見出し、それを解決するための 計画を立てることができる	計画→実践→振り返り→再計画 …という一連のサイクル循環を 自ら構築し実践できる

令和7年度入学生教育課程							
単位	第1学年	単位	第2学年		単位	第3学年	
類型	未来共創科	類型	未来共創科		類型	未来共創科	
			スキル	スタディ		スキル	スタディ
1	現代の国語	1	論理国語	論理国語	1	論理国語	論理国語
2		2			2		
3	言語文化	3	文学国語	古典探究	3	文学国語	古典探究
4		4			4		
5	地理総合	5	公共	公共	5	政治・経済/倫理	地理探究/日本史探究
6		6			6		
7	歴史総合	7	地理探究	地理探究/日本史探究	7	数学Ⅱ/数学ⅠA演習	数学Ⅲ/ 数学演習/ 国語表現
8		8			8		
9	数学Ⅰ	9	数学Ⅱ/数学ⅠA演習	数学Ⅱ	9	体育	
10		10			10		
11		11			11		
12	数学A	12	科学と人間生活		12	英語コミュニケーションⅡ	数学C
13		13			13		
14	生物基礎	14	体育	数学B	14	芸術Ⅲ	政治・経済
15		15			15		
16	体育	16	英語コミュニケーションⅡ	物理基礎/地学基礎	16	地理探究	化学
17		17			17		
18		18			18		
19	保健	19	論理・表現Ⅱ	体育	19	簿記演習/ 演奏研究/ クラフトデザイン	物理/生物
20	20	20					
21	芸術Ⅰ	21	芸術Ⅱ	保健	21	ソフトウェア活用/ 課題研究(家)/ 実用の書	体育
22		22			22		
23	英語コミュニケーションⅠ	23	簿記/フードデザイン	英語コミュニケーションⅡ	23	ビジネス・コミュニケーション/ 保育基礎	英語コミュニケーションⅢ
24		24			24		
25	発信英語Ⅰ	25	25	25			
26	家庭基礎	26	発信英語Ⅱ		26	国語演習/化学基礎	
27		27			27		
28	情報Ⅰ	28	情報処理/生活と福祉	論理・表現Ⅰ	28	芸術課題探究/ スポーツⅡ	論理・表現Ⅱ
29		29			29		
30	清水学際Ⅰ	30	総合的な探究の時間	総合的な探究の時間	30	総合的な探究の時間	総合的な探究の時間
31		31			31		
32	LH	32	LH	LH	32	LH	LH

文部科学省指定事業

令和6年度 新時代に対応した高等学校改革推進事業 普通科改革支援事業  
実施報告書（第3年次）

令和7年3月発行

発行者：高知県立清水高等学校

〒787-0336 高知県土佐清水市加久見893-1（令和7年3月まで）

〒787-0330 高知県土佐清水市清水ヶ丘26-22（令和7年4月から）

TEL：0880-82-1236 FAX：0880-82-2264

E-Mail：320121@ken.pref.kochi.lg.jp

